

## 中学生の思いを伝える 「少年の主張」

7月8日(土)に総合公園体育館サブアリーナにおいて「社会を明るくする運動推進大会・家庭教育講演会」が開催されました。

講演会の中で、中学生が自分の体験等から学んだことを「少年の主張」として発表しました。発表された中学生の作品を紹介します。ぜひご一読ください。

●問合せ 生涯学習課  
(美浜町総合公園体育館内 ☎82-5200)

## 海を守る



河和中学校  
三年 甲斐 咲空

現在、世界では海洋汚染が深刻な問題となっています。特に海に大量に流入するプラスチックのごみが様々な深刻な問題を起している。そのごみは海を汚染するだけでなく、そこに住んでいる生き物にも影響を与えています。

私の住んでいる町には海があります。私の家からはその海を広く大きく見ることが出来ます。天気の良い日には昼は青く太陽に照らされてキラキラ輝いてとてもきれいです。夜も月の出や満ち欠けによって月が海に映し出されていてとてもきれいに見ることが出来ます。こんなにきれいに見

える海ですが、いざ目の前にすると、捨てられているか、流れ着いたのか分かりませんが、砂浜海岸には大小様々なごみが多く落ちています。そして海水は藻がはついでどんより濁っています。波が引く時に少しだけうっすら透明になり貝殻が見える程度です。

私の母は私と同じこの町で生まれて、この町で育っています。そして、母方の祖父もこの町で生まれて、この町で育っています。祖父に話を聞くと、この町の海は、昔はとてもきれいで海水浴場として他の市や町からお客さんが来たり、貝も魚もたくさんとれたりしたそうです。祖父は小さい頃、貝や魚をとってはお魚屋さんへ持って行き、小遣い稼ぎをしていたんだよと笑いながら教えてくれました。母の中学生の頃には海はだんだんと汚れていき、海水浴場としての観光客はいなくなり、地元の子がたまに泳ぐくらいだったそうです。でも、ごみは今ほどなく、友達と貝殻を拾ったり海岸をランニングしたりしていたそうです。この約六十年の間でこんなにも海の様子が悪化しています。

調べたところ、私の住んでいる河和の海は日本の海のワーストランキング十位に入っています。私も小さい頃に母や祖母と散歩がてらよく海に出かけて貝殻拾いに行っていたので、すごくきれいだとは思わなかったけど、まさかワーストに入っているとは思わず、驚きました。私の町にはせつかく海があるのに、ごみだらけの濁った海水なんてもったいないです。どうしたらきれいな海に戻るのかみんなど考えて、実行していきたいです。

私は小学生の夏休みに子ども食堂にお昼ご飯を食べによく行っていました。その時に地域の人たちとの交流でEM泥団子を作って近くの川に入れるボランティアをしたことがあります。EM泥団

子とは、EM菌の入った米のとき汁発酵液とEM活性液を混ぜて発酵させて作成したEMボカシに糖蜜と土を混ぜ合わせ、団子状にしたものです。このEM泥団子を汚泥のたまった海や河川などに投入するだけで、堆積したヘドロを発酵分解し、元の生態系に戻すことができるということを教わりました。川は海へと続いています。泥団子の大きさは握りこぶし程の小さなものですが、一人一人の日頃からの行いによって、それが積み重なり大きなものとなるでしょう。こんな簡単なことで海がすぐにきれいになるとは思わないけれど、何もしないよりはいいなと思います。あとは、単純に砂浜のごみ拾いなど私一人でも、友達と遊ぶついでに家族とお休みの日にすること、少しずつですが、きれいな海へ戻ると思います。きれいな海にするために私たちに出来ることはまだまだたくさんあると思います。例えば、海水の汚染の原因である生活排水の汚れを少しでも減らすため、飲み物などは飲みきれぬ分だけ注ぐ、皿洗いの際には皿に付いている汚れや油は洗い流す前に拭き取るなどです。

私たちは毎日のようにプラスチックを使い、プラスチックごみを出しています。プラスチックは生ごみなどとは違い、自然に分解されません。外部からの衝撃などで小さくなることはあっても、完全に無くならず、数百年後も消えずに存在し続けると言われています。そのため、ごみとして海などに流れ出ると、そのまま溜まり続けてしまうのです。海のプラスチックごみを減らすためには、プラスチックの使用を控えることやごみのポイ捨て、不法投棄をしないことでごみを減らすことができると思います。私もこれらのことを意識して生活し、大切な海を守っていきます。

# 後悔のない 今を



野間中学校  
三年 岸岡 莉胡

心臓がキュツとなった。自分のせいで大切な人の命を奪ってしまうのではないかと焦り、ひどく後悔した。今まで考えたことも無かった身近な人の死、それを初めて感じたあの日のことを、私は一生忘れることがないだろう。

私の父は数年前から、ANCA血管炎という免疫不全の難病を患っている。この病気には、現在明確な治療法がないため、父は大量の投薬で症状を抑えながら日々の生活を送ってきた。免疫不全とは、本来体を守るために存在している免疫細胞が異常を起し、正常な細胞までも攻撃しだす病気だ。風邪を引いただけでも生命に関わってくる、常に死と隣り合わせの生活。完治する方法は今のところ存在しない。それでも、父は難病と向き合いつて闘っている。私はそんな理不尽な運命を背負っていても突き進んでいく父をとて誇らしく思う。

ある日、私は新型コロナウイルスに感染した。私のみならず、母、姉、そして父が新型コロナウイルスに感染し、病状が悪化した父は入院することになった。病気の父が入院するというのはよくあることで、今回も数日後にはケロッとした顔で帰ってくるのだらうと、私は軽い気持ちで考えていた。しかし、父が入院して数日後、家は重い空気に包まれていた。

「パパが死ぬかもしれない」  
母からそう淡々と告げられた私は、あまりの衝撃

に情報を処理しきれなかった。「呼吸おいて、父にもう会えないかもしれない」ということを理解する。涙が止まらなかつた。もう「呼吸おくと、後悔の念が心の中で溢れかえる。その時初めて、人の命の重みを感じた。もつと父と話し、出かけ、思い出を作っておけばよかった。今まで自分が父にとつてきた態度の全てに悔しさを覚えた。何かあることに父のことを考え、生きて帰ってくるように願いつけた。この願いが届いたおかげか父の強い心のおかげか、そして数日入院が早かつたこともあり、父の病状は回復し、一週間もしないうちに家に帰ってきた。きつと、また同じように新型コロナウイルスに感染したとき、今回のような奇跡は起こらないだろう。だからこそ、これから先、私は父と過ごす時間を一分一秒と大切にしていきたい。

この体験から、「今を共に生きる人との時間を大切にしてほしい」と主張する。家族、友達など身近な人と生きる時間を大切にしてほしい。中には、家族が嫌い、この友達は苦手だという人もいるだろう。嫌いな人との時間をなぜ大切にしなければいけないのかと考えるかもしれない。私も正直父のことが好きというわけではない。しかし、そつけない態度をとつていたことを泣くほど後悔した。だから、もう二度これから先の長い未来を見据えた上でその人について考え直して、改めて聞いてほしい。

あなたは、テレビで全く知らない人が亡くなつたというニュースを見て、泣くほど悲しんだことがあつただらうか。ほとんどの人が「可哀想に」と思うだけで、泣けるほど悲しんだことはないはずだ。では、逆に身近な人が事故に遭い、亡くなつたと言われたらどうだらうか。きつと、私が体験したように、ひどく悲しみ、泣き、後悔するだらう。今、当た

り前のようになあなたの傍にいる家族、友達のことには「当たり前」だからこそその存在の大切さに気が付かない。そしてその「当たり前」が崩れた時に、大切さに気が付くのだ。しかし、これでは気が付くのに遅すぎる。死んでしまつては生き返ることはなく、こんなにも自分にとつて大きな存在だったのに、なぜもつと大切にしなかつたのだらうという後悔だけがあなたに残つてしまう。そんな後悔を、私はしてほしくない。今を共に生きる大切な人との時間を一分一秒大切にしているか。一度その人との思い出を振り返つて、考えてほしい。もし、大切にすることができていなかったのであれば今からでも大切にしてほしい。大切にできているのであればもつと大切にし、後悔の残らない未来を生きしてほしい。

